

第五章 作品の倫理性が芸術的価値にもたらす影響

——不完全な倫理主義を旨指して

森 功次

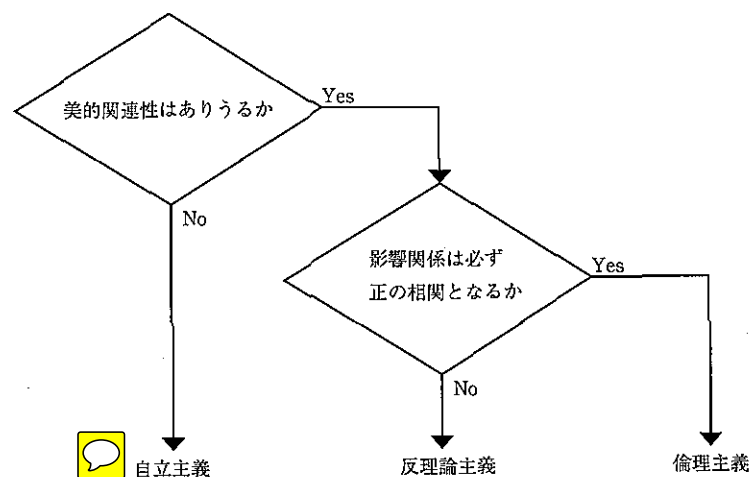
三人の映画好きが、マフィア映画の傑作『ゴッドファーザー』について、こう話している。

晴郎「この映画の見所は、なんといってもボスの冷酷非情な振る舞いだ。とりわけ、あの残酷な殺戮シーン、素晴らしい。」

長治「何言ってるんだ。この作品が傑作たりえたのは、真の家族愛を描いているからだよ。」

重彦「いや、残虐性とか愛とか、作品の評価に関係ないんじゃないかな。絶妙な音楽とカメラワークがこの映画を傑作にしているんだよ。」

このありふれた映画談義のうちに現れているのは、〈芸術作品のうちにある倫理的な要素は、作品の価値にどう関わるのか〉という、美学における伝統的な問いである。作品の倫理性は、そもそも芸術的価値に関係するのだろうか？ 関係するとしたら、善を描くことで作品の価値は向上するのだろうか？ 逆に、不道徳な行為の賛美によって作品の価値が向上するなどということは、果たしてありうるのだろうか？



のか、また影響するとしたらどのような影響をあたえるのか、という問題である。^③この論争においては多くの論者がさまざまな主張を行っていたが、近年ゴートによってひとつの簡潔な分類が提示されている。まずはゴートにならない、この論争における立場を倫理主義、反理論主義、自律主義の三つに区分しよう。この区分により、ゴートが提唱する倫理主義の位置づけが明確になる。ここで各立場を分ける基準となるのは、倫理性と芸術的価値との間に影響関係を認めるか（ゴートはこの影響関係を「美的関連性（aesthetic relevance）」と呼ぶ）、そして、倫理性と芸術的価値との影響に負の相関を認めるかどうか、である【図参照】。

だが分類に入る前に、議論の前提として重要な論点を四つほど確認しておきたい。

まず作品の倫理的価値に関して押さえておくべきことが三つある。ひとつは、本論争では、作品の倫理的価値を査定するさい、作品の構成要素とならない倫理的余波は考慮に入れない、という点である。たとえばロックミュージックが子供に悪しき影響を与えるといった外在的な教育効果

近年、英語圏の美学者たちの間で、こうした問題がふたたび注目を集めている。本論では、この近年の議論を紹介しつつ、現在の論争状況を整理し、各立場間の争点を明示したい。本論は、とりわけペリス・ゴートの二〇〇七年の著作『Art, Emotion and Ethics（以下AE）』の検討を中心に議論を進める。ゴートは、この著作において倫理主義（ethicism）を提唱し、〈作品の倫理的価値が芸術的価値に影響することはありうるし、影響するときには倫理的長所（Re⁺）は必ず、芸術的価値を向上させ（A⁺）、倫理的欠陥（Re⁻）は必ず、芸術的価値を低下させる（A⁻）と主張している。^①この立場によれば、家族愛のような倫理的に善いことを称揚する作品は、その点において芸術的価値を高めることになる。この倫理主義の主張を検討し、その問題点を明らかにすることが本論のひとつの目標である。

まず第一節では、倫理主義の位置づけを、自律主義（autonomism）、反理論主義（anti-theoretical view）と対比させつつ簡単に確認する。つぎに第二節では、ゴートが倫理主義を反論から擁護するために用いている論法を確認しつつ、倫理主義の主張をより明確に示す。第三節、第四節では、それぞれ作品の倫理的な悪さ、善さが芸術的価値に与える影響を、不道德作品、説教臭い作品の検討を通じて明らかにする。最終的に本論が目指すのは〈倫理的に悪いことが作品の価値を高めることはありえないが、倫理的に善いことが作品の価値を低めることはありうる〉という不完全な倫理主義（half-way ethicism）である。

一 論争の焦点と、倫理主義の位置：倫理主義、自律主義、反理論主義

本論が考察するのは、芸術作品がもつ倫理的な善し悪しは、はたしてその作品の芸術的価値に影響する

や、ある時代の作品がのちの時代に勝手に政治的プロパガンダに使用されるといった事態は、本論が問題とする作品の倫理性を左右するものではないとみなす。より具体的にいえば、ナチスがワーグナーの楽劇の曲を軍隊の鼓舞に使用したという事実は、この本論の枠組からすれば、ワーグナーの作品の倫理性を左右するものではない。

次に重要なのは、作品の倫理性は何を基準に決定されるのか、である。ここでは、いかなる倫理的行為が描かれているか、という基準を用いることはできない。というのも、倫理的に悪い行為を描写する作品が、即、倫理的に悪い作品となるわけではないからだ。殺人者の葛藤を描くことで観賞者に倫理的反省を求める作品は、むしろ倫理的に善い作品とみなされるべきである。ゴットは倫理性を査定する基準として、作品が芸術的手法 (artistic means) を通じて示す倫理的態度が作品の倫理性を決定する、という考え方を提出している (Aeg8)。これに従えば、たんに盗み・殺人の場面を描くだけでは、作品は非倫理的な作品にはならない。また、募金する人間が登場するだけで、倫理的に善い作品ができあがるわけでもない。重要なのは作品の再現内容ではなく、作品が芸術的手法を通じて示す倫理的態度——たとえば、金儲けのための農薬大量使用を許すべきではない——という価値観を是認 (endorse) したり、その価値観の是認を観賞者に要求したりといった態度——である。以下本論も、この基準を採用することにする。

第三に押さえておくべき点は、作品の倫理的態度は最終的に何によって決定されるのか、である。これは作品解釈に関わる問題ともいえる。これに関してゴットは、実際の作者の意図を重視する立場 (actual intentionalism) を採っている。つまり、実際の作者がその作品を通じていかなる道德的態度を示しているのか、が倫理性を査定する最終的な審級となる。この見解に従えば、残酷な主人公を描きつつ、作者がそれ

を通じてある道德的態度について反省的に考察させるよう意図しているような作品は、倫理的に善い作品となる。⁽⁵⁾

最後に、芸術的価値に関してひとつ述べておこう。しばしば問題となるのは、そもそも芸術的価値は何によって決定されるのか、である。芸術的価値に関しては、実は各論者が様々な見解をもっており、いまだ統一的な見解はない。芸術的価値を美的価値に還元するような一元論的見解を採る者もいれば、芸術的価値のうちに認識的価値や歴史的価値など様々な要素を認める多元論的見解を採る論者もいる。⁽⁶⁾だが、作品の倫理性をめぐる論争を考察するには、美的価値一元論はあまりふさわしくない。というのも、批評の実践を見れば明らかのように、われわれは芸術作品を評価するにあたって一般的に、想像体験を通じてある種の知見がもたらされるといった認識的価値を、作品の価値として評価しているからである。『天使なんかじゃない』などの少女漫画が恋愛バイブルとして評価されるとき、その一面としては、〈恋に落ちる若者の心理を教えてください〉という点が評価されているのである。美的価値一元論はこの批評実践をすくうことができない。よって、以下本論も、芸術的価値に関しては、認識的価値を含み入れる多元論を前提とする。⁽⁷⁾

さて、以上を踏まえ、この論争における倫理主義の位置の特定に入ろう。この特定は、二つのステップからなる。まずゴットは最初のステップとして、自律主義とそれ以外を、倫理的な善し悪しとその作品の芸術的価値を左右することはそもそもありうるのか、という観点から区別する。この問いに「その影響関係は絶対にありえない」と答えるならば自律主義、「何らかの仕方では影響することがときにありうる」と答えるならば、倫理主義もしくは反理論主義となる。

次のステップでは、その影響関係が、正の相関でしかありえないと考えるか（倫理主義）、その逆の関係もありうるかと考えるか（文脈主義）で、立場が区別される。倫理主義の主張とは結局、〈芸術的価値に影響する倫理的長所（ RE^+ ）は必ず、芸術的価値を向上させ（ A^+ ）、芸術的価値に影響する倫理的欠陥（ RE^- ）は必ず、芸術的価値を低下させる（ A^- ）という主張である。一方、反理論主義の主張は、その影響関係が逆になることがありうる、つまり、〈 $RE^+ \rightarrow A^-$ や、 $RE^- \rightarrow A^+$ といった関係がありうる（どちらになるかは、その作品がもつ他の性質との関係において決まる）〉というものである。

倫理主義の主張は、〈倫理的な要素から芸術的価値への影響がそもそも絶対、ありえない〉と主張する自律主義と比べれば、そう強いものではない。倫理主義は、その影響が場合によってはありうる、と認めているからだ。だが倫理主義は〈その影響関係があるときは、それは必ず、 $RE^+ \rightarrow A^+$ 、 $RE^- \rightarrow A^-$ という正の相関関係となる〉と主張する点で、そこから逃れるような相関がありうる、と考える反理論主義と比べると、強い主張を行っている。

倫理主義、反理論主義、自律主義というこの三つの区分は、網羅的かつ排他的な区分である。よって、この論争に参入する論者はすべて、この三つの立場のいずれかに組み入れられることになる。たとえばキャロルは、穏健な道徳主義（moderate moralism）を表明し、「芸術作品のうちにある道徳的欠陥はときに芸術的欠陥になるし、道徳的長所はときに芸術的長所になる」と主張しているが、キャロルの立場は「とき」（sometimes）という副詞のために、結局は反理論主義に組み入れられる（Carroll [2000] p.377）。また、キーラン^(a)、ジェイコブソンが主張する〈作品の不道徳性がその芸術的価値に寄与しうる〉という不道徳主義も、この区分によれば反理論主義に組み入れられる（Jacobson [1997], [2006], Kieran [2003]）。

二 ゴートの倫理主義

以上、簡単に倫理主義の位置づけを確認したところで、ゴートの倫理主義の主張をより詳細に確認していこう。本節では、倫理主義に向けられるいくつかの批判をとりあげつつ、それに対する応答を見ることが、倫理主義の主張を明確化する。この作業を通じて、議論を呼びがちないくつかの作品についての評価も明確化されるだろう。おそらく真つ先に挙げられるだろう批判は、「不道徳な傑作」（たとえば、ペドフィリアを賛美する『ロリータ』や、ヤクザの価値観を賛美する『極道の妻たち』）をどう考えるのか、という批判であるだろうが、不道徳作品の扱いについては、次節で考察する。本節では、それ以外の反論をとりあげつつ、倫理主義の主張を確認することしよう。

第一に、芸術作品はそもそも倫理的な善し悪しをもたない、という自律主義からの反論がある。これに対しては、作品が倫理的な極性（polarity）をもつことは可能である、と応答できる。芸術作品に制作者が何らかの意図を込めることは可能であり、善を称揚する作品や、悪しきプロパガンダのための作品は実際にしばしば制作されている。

第二に、倫理的な善し悪しがあるとしても、そのことが芸術的価値を左右することはない、という自律主義者からの再反論がある。だが、これはわれわれの批評実践にそぐわない。ゴートが「芸術的手法を通じて」という制限を設けていることに着目しよう。作品が芸術的手法を通じてある態度を示すことは、芸術的価値の査定対象になりうる。「子供に新しいおもちゃを次々と買い与える現代消費社会の風潮を、ユーモラスに批判した作品」という批評文には、そう奇妙なところはない。また、技法や描写の迫真性が同じ

くらい優れている二つの作品があったとき、われわれは道徳的洞察をまったく与えてくれない作品よりは、洞察を与えてくれる作品をより評価するだろう。さらに、倫理的に受け入れがたい態度を要求してくる作品に対して、われわれの想像的な没頭(imaginative engagement)が妨げられることがある(この現象は、近年「想像的抵抗(imaginative resistance)」と呼ばれ、注目を集めている¹²)。最後に、作品が求めている観賞態度が倫理的にふさわしくないものだとして認識され、その結果われわれが、その作品を芸術作品として認めるべきではないと判断することもあるだろう。これらのことに鑑みると、倫理的な要素が芸術的価値と無関係とはやはり言いがたい。

第三に、作品の倫理性がすべて芸術的価値に関わるわけではない、という反論がある。もちろん、作品がもつ倫理的要素のすべてが芸術的価値を左右するわけではない。芸術観賞において、些細な倫理的価値観の不一致は無視されうるものである。倫理主義の主張は、(作品の倫理的態度が芸術的価値に影響する場合には、その影響は必ず正の相関となる)というものである。

また、たとえば小説の最後のページに物語内容とは関係の無い道徳的箴言がおまけのように付加される場合、その倫理的内容は芸術的手法を通じて表されているのではないため、芸術的価値には関わらない、とゴートは述べている。ここにおいても重要なのは「芸術的手法を通して」示される道徳的態度である。たしかに、この「芸術的手法」の範囲をどう規定するかは、ひとつの問題であるだろう。だが、(たんに一つ二つの教訓的寸言の添付によって作品の価値が大幅に左右されることはない)というゴートの眼目を押さえておくことは重要である。

第四に、不道徳な態度を示しつつも傑作と認められている作品が現にある、という反理論主義からの反

論がある。だがゴートは決して、 R_2 がある作品が必ず傑作になるとか、 R_2 をもつ作品は必ず駄作になるといった主張をしているわけではない。ゴートの主張は、(作品は、 R_2 をもつ限りにおいて、芸術的価値を向上させている)(作品は、 R_2 をもつ限りにおいて、芸術的価値を低下させている)というものである。つまりこれはたんに「である限りにおいて」という点での主張でしかないのである。議論の焦点が向けられているのは、ある作品が倫理的善さをもっているとき(その作品が総体的に見て良い作品なのか)ではなく、(その作品に、芸術的に見て評価に価する面が備わるのかどうか)である。

第五に、不道徳作品の不道徳な要素はまさにその作品の価値の重要な構成要素であり、その作品の価値から切り離すことはできない、という反論がある。なるほど、 R_2 を取り除いたとき、ほかの諸ファクターとの関係次第で、作品の価値がさらに損なわれると思われる場合はたしかにある。これはゴートも認めている。ゴートは、倫理的に悪い箇所を取り除けばそのぶん作品の全体的価値が向上する、という主張をしているのではない。ゴートの主張は、作品の改変後の価値についてのものではなく、あくまでその作品が現在もっている倫理的悪(善)によって、作品の現在の価値が低くなっている(高くなっている)という主張である。

三 倫理的欠陥が与える影響…不道徳作品の価値とは？

以上、ゴートの倫理主義の重要な主張をいくつか詳細に確認した。以下では、倫理主義の主張を、道徳的に善い作品(これを正の方向と呼ぼう)についてと、悪い作品(負の方向)についての、二つの方向にわ

けて考察していきたい。ゴートは倫理主義に、 $RE \rightarrow A+$ と、 $RE \rightarrow A$ と二つの主張を込めている(この二つの主張を備えた倫理主義を、ゴートは「完全な倫理主義 (full-blooded ethicism)」と呼び、ゴート自身もこの立場を支持している)。本論の狙いは、この倫理主義の完全性について検討することである。この考察を通じて、ゴートの主張がより明確化され、ほかの立場との争点が明らかになるだろう。本節ではまず、負の方向性($RE \rightarrow -$)について検討しよう。正の方向性($RE \rightarrow A+$)については、次節で検討する。

負の方向での主張に対して真っ先に反論として挙げられるのが、いわゆる「不道德な傑作」である。その例としては、社会慣習に反する性癖を巧みに描くナポコフ著『ロリータ』などの性的小説、また、暴力的表現をありありと描く北野武監督作品『アウトレージ』のようなヴァイオレンス映画、などが挙げられよう。こうした作品に対しては、まさに不道德な面を描くことが作品の質を向上させている、という評価がしばしば与えられる。また、この論争において頻繁に取り上げられる例としては、レニ・リーフェンシュタール監督『意志の勝利』が挙げられよう。ダイナミックな映像表現によってナチスの党集会を描き、ナチス思想を全面的に賛美する姿勢を打ち出しているこの作品に対し、われわれはどのような評価を与えるべきなのか。この問題は、本論争において各論者の立場を分類するひとつの試金石となっている。

先に述べたように、倫理主義者は「 $RE \rightarrow A+$ 」となるような反例をたつたひとつ、挙げさえすればよい。反理論主義者がこれに反論するためには、「 $RE \rightarrow A+$ 」となるような反例をたつたひとつ、挙げさえすればよい。反理論主義者が挙げるべきは、次の条件を満たす作品である。

(i) その作品は、ある価値観を是認したり、また観賞者にその価値観を是認させようとしたり

すること、ある種の態度をとっている。

(ii) その態度は、倫理的にみて悪いものである。

(iii) その態度が芸術的手法を通じて示されることが芸術的評価の対象となり、その結果、芸術的価値が向上している。

反理論主義に對抗する倫理主義者は、つぎつぎと挙げられるこうした不道德作品の例を、火消し作業を行うようにひとつずつ論駁していかねばならない。実際ゴートも、不道德な作品を挙げて「 $RE \rightarrow A+$ 」がありうることを主張する反理論主義者たちに対し、倫理主義の立場からさまざまな論駁を加えている。私の見るところ、倫理主義者が行う論駁は、主に以下の五つのパターンに区別できよう。¹³⁾

(a) 当該作品の価値を高めているのは RE ではなく、むしろ $RE+$ である、という論駁。

ゴートは『ロリータ』に対してこのような評価を加えている(これは(ii)を否定することになる)。ゴートによれば『ロリータ』はペドフィリアを賛美しているように見えるが、実はよく読むと、『ロリータ』はペドフィリア的価値観を是認しているわけではない。¹⁴⁾『ロリータ』は、われわれ人間がいかにペドフィリアに容易に陥ってしまうかを鮮やかに示した作品であり、この作品は、その描写を通じて、むしろペドフィリアの倫理性に対する反省的考察を読者に迫っているのである。その点において、『ロリータ』は、一般的な受けとめられ方とは逆に、倫理的に優れた作品だとゴートは言う。

(b) 当該作品の評価を高めているのは、実は RE ではなく、倫理とは関係の無い要素である、という論駁。

激しい暴力シーンが満載な『アウトレイジ』のような暴力映画に対しては、この(β)のような反駁が可能であるだろう。われわれが心を動かされているのは、実は、ダイナミックなカメラワークや効果的な音響による映像の躍動感だつたりする。この場合、そもそも作品評価に倫理的な態度は関わっていない(ⅰ)の否定)。

論駁。

また、『アウトレイジ』のような作品の大半においては、そもそも悪を是認することは観賞者に求められていない。悪の価値観を是認する作品であるかのように捉えられがちなこれらの作品は、実は作品は単に暴力的場面を再現しているだけで、それはせいぜい、観賞者に(芸術慣習の範囲内で)暴力的価値観を是認することを想像することを求めるに過ぎない。これは、暴力的価値観を是認させようとするとは、まったく別のことであるし、ふつうわれわれは悪の想像を指定(prescribe)することそれ自体は、倫理的に良いこととも悪いことともみなさない(ⅱ)の否定)。

(δ) 作品の倫理性はたしかに悪かもしれないが、その悪は作品の価値に影響するほどのものではない(つまり、REではなくたんにE)、という論駁。

たしかに厳格な倫理観をもつ者からすれば、悪への共感を想像させることすらも悪しき行為とみなされるかもしれない。だが、芸術観賞という慣行に鑑みれば、この想像的共感の指定は一般的なものであり、そうあからさまに批判されるほどのものではない。そして、たとえこの指定それ自体が悪だとしても、この悪への共感を想像させることそれ自体の悪性は、作品の価値を決定的に左右するほどのものではない。

ない。悪を想像させることは、読者の心の動きを操作するために行われる、ごくふつうの「仕掛け」であり、その悪性そのものが作品の価値を高めているわけではない(ⅲ)の否定)。作品の価値を上げているのはむしろ、残酷に殺されるチンピラの心理を想像させたり、違法薬物の取引現場の緊張感を想像的に追体験させたりといった、稀少性の高い想像体験をさせる仕掛けの創意性や巧みさである(またここでは、カメラワークや音響効果によつて引き起こされる肉体感覚が、われわれの情動的反応の強度を強めるだろう)。よつて結局、『アウトレイジ』のような暴力的作品は、反理論主義を支持する事例にはならない。

(ε) 当該作品がもっているREは結局Aとして働く。その作品は、全体としてみればひとつの傑作として評価されるかもしれないが、それでもやはり、REを保持している点においてAを被っている、という論駁。

ゴートは『意志の勝利』に対して、このような評価を与えている。『意志の勝利』は全体としては高い芸術的価値を与えられるかもしれないが、それでも倫理的な面においては、ナチス思想の賛美という際立つた欠陥を抱えており、そのために芸術的価値は低下することになる、とゴートは言う(BG465)。なぜゴートがこのように考えるかという点、作品が倫理的に問題のある態度を示しているとき、作品のその態度をそのまま受け入れるような反応をすることは、やはり「ふさわしい(merited)」ことではないからだ、というのがその理由である。芸術的手法には、それぞれふさわしい反応がある。凶暴なモンスターの描写には「怖がる」のがふさわしい反応であるし、プロポーズの成就、結婚式における親からの言葉などの描写には「共感、感動する」のがふさわしい反応である。このふさわしい反応を引き起こせない作品は、芸術的に失敗している。だが、この「ふさわしさ」は倫理的反省の影響をうける、とゴートは言う。『意志の勝

「利」の映像技法がいかに優れているようにも、『意志の勝利』を十全に観賞するためには、ナチス賛美という倫理的に見てふさわしくない態度が要求される。その点において、ナチスの価値観を容認できないわれわれは、『意志の勝利』を十全に観賞することができない。つまり、われわれの観賞は作品の非倫理性によって妨げられるのである。こうして結局、非倫理的な作品はそのぶんだけ芸術的価値が低下することになる。

以上、五つの主な反駁パターンを見た。この「火消し作業」はある程度上手くいっているように——少なくとも私には——思われる。倫理主義は、不道德作品の例を退けることを通じて、少なくとも負の方向性においては、この論争におけるひとつのありうる立場を打ち出すことに成功している。先に述べたようにキヤロルも、作品の不道德性が価値を高めているような作品が存在するかもしれないと述べているものの、結局こうした作品の具体例を提出できてはいない (Carroll [2000] p.377)。またステッカーも、不道德主義と呼ばれる立場を検討した結果、そうした実例を提出することは難しいとして、倫理主義を擁護する姿勢を見せている (Stecker [2010])。そして私も、正直なところ、倫理主義を批判できるような反例を思い浮かべることができない。よって現時点では私も、彼ら同様、この負の方向に関しては倫理主義を擁護する側に立たざるを得ない。

四 倫理的長所が与える影響…説教臭い作品

次に、ゴートの倫理主義を正の方向から検討しよう。ここで検討されるのは (Re+は必ずA+となる) と

いう主張である。こう主張するにあたって、ゴートが主に依拠しているのは、道德美論法 (moral beauty argument) と、認識主義的論法 (cognitivist argument) である。まず道德美論法では、徳は美しいものだ、と言われる。²⁰ たしかに伝統的には徳はひとつの美として語られてきた。忠臣蔵の物語においては、しばしば主君への忠義心がひとつの美として描かれている。徳を賞揚するという作品の態度によって、作品自体も美の側面をもつようになり、そのぶん芸術的価値も上昇する、というのがこの論法の考えである。次に、認識主義的論法では、倫理的な洞察を与えることはひとつの芸術的価値だ、と言われる。たしかに芸術批評の場では一般的に、道德的知見を与えることはひとつの芸術的価値として語られる。たとえば、『ゴッドファーザー』は、家族への愛から冷酷な選択を行う主人公を描くことで、そういう立場にある人物が行う倫理的選択の一例をわれわれに示してくれる。そうした作品が「人間本性の一面を開示してくれる作品」として評価されるのは、そう奇妙なことではない。道德的な認識を与えることは、一般に作品の芸術的価値にプラスに働くとされている。よってこの点でも、Re+と言え。以上、これらの論法に鑑みれば、倫理主義の主張は、正の方向においても一見もつともらしそうに思われるのである。

倫理主義に反論する者は、先ほどと対称的に、以下の条件を満たす作品を挙げねばならない。

- (a) その作品は、ある価値観を是認していたり、また観賞者にその価値観を是認させようとしたりという、ある種の倫理的態度をとっている。
- (b) その倫理的態度は、善いものである。
- (c) その態度が芸術的手法を通じて示されることが芸術的評価の対象となり、結果、その作品の芸術的

価値が低下している。

こうした例として挙げられうるもののひとつに、説教臭い作品 (didactic work) がある。つまり、説教臭い作品は、まさに倫理的に善いことを述べることで作品の価値を下げているのではないか、という反論がなされるのである。

この反論に対しゴートは、説教臭い作品はある種の視野の狭さを示しており、それはある意味で倫理的な欠陥である、と応答している (A104)。ある作品に対して「この作品はやけに道徳的だ」「説教臭い」などの批判がなされることがあるが、そこでは「この作品は不道徳の対極にある」ということが言われているのではなく、むしろ「提示する姿勢に道徳的繊細さが欠けている」「押し付けがましい」「思慮が浅い」という主張がなされているのだ、と。ゴートはこうして、上の定式化の (b) を否定する。

だが、私の見るところ、この応答には問題がある。ゴートは説教臭い人に対する批判と説教臭い作品に対する批判の両方を、同様に「説教臭さとは倫理的欠陥である」というひとつの応答で処理しているが、その処理の仕方には問題がある。人間が説教臭いことと芸術作品が説教臭いことは、実際には別の観点から批判されうるのである。

まず説教臭い人に対する批判について見てみよう。なるほど日常生活において説教臭い人が批判されているのは、視野の狭さや空気の読めなさといった、見方によっては倫理的欠陥とも言えるものである。²³

では、説教臭い芸術作品についてはどうだろうか。なるほど、作品に対しても、説教臭い人に対する批判と同様、押し付けがましいなどの批判がなされることはありうる。これは作品の倫理的態度に対する

批判である。作品のこうした倫理的欠陥に対して、われわれ観賞者は反感・嫌悪を覚えるだろう (よって、これは芸術的欠陥となる)。

だが、説教臭い芸術作品については、これとは別様の批判が少なくとも二つある。そしてそのどちらの批判も、反感の出処を倫理的欠陥に見ることはできないような批判である。

そのひとつは「芸術的手法がうまく働いていない」という点からの批判である。この場合、批判は、説教臭さの倫理的欠陥ではなく、観賞者に説教臭いと思わせてしまったその表現手法の未熟さに向けられる。これはまさに芸術的観点からの批判であり、「視野が狭い」とか、「相手の立場に対する認識が欠けている」などといった批判とは異なるものである。つまり、この批判は、伝達の姿勢や態度に向けられる批判ではなく、「説教性を描く手法・描写が未熟なせいで観賞者を没入・感動させられなかった」という点で、伝達技巧に向けられる批判である。

とはいえ、これは芸術的側面に特化した批判である。作品の質を下けている芸術的未熟さは、倫理性と切り離しうるものである。つまりこのケースにおいては、芸術低価値の低下と倫理的な善さとの間に、必然的な結びつきは存在しない。「倫理的に善い態度を取る」ということと「伝え方が下手だ」ということは独立なのだ。その意味でこれは、CG や効果音がうまく機能せず狙いとす反応を引き起こせなかったケースと同様の失敗である (その意味ではこれは、「技術的観点からの批判」とも言えるものである)。よって結局、このケースは条件 (c) を満たすことができない。この事例は、倫理主義の立場を危うくするような事例ではないのである。

だが、説教臭い作品にはもうひとつの批判がなされうる。それは、まさに説教的な姿勢を示してしまっ

たことで作品が陳腐化してしまった、という批判である。⁽²⁾ 肝心なところで主人公が案の定、道德的態度を示し、興ざめになってしまふ作品を考えてみよう（また同様の例として、勧善懲悪で終わることで批判されるような作品を考えてみてもいいかもしれない）。さらにこの作品は芸術的に優れた手法を駆使しており、倫理的な姿勢を打ち出すプロット以外は、非の打ち所が無いでしょう。このようなケースにおいては、肝心なところである種の倫理的に善い態度——たとえば「友達は大切だよ」と訴える態度——をお約束的に打ち出してしまったただその点において、作品の価値が低下してしまう。作者がある種の善を是認し、そこに美を見出し、その善を美的なものとして提示してくることそのことが、観賞者に飽き飽きとしたため息をつかせることになり、ときには不快感を与えさせるのである。⁽³⁾ これは、まさに倫理的に善い態度をとってしまったことが作品の質を下げるケースである。

このケースに対しては次のような再反論があり得よう。このケースで批判されているのは、作品がある種の善を是認することそのものではない。ここで批判されているのは、作者がある種の善に美的、良さを見出していること、また、作者がある種の善を美的に観賞するよう観賞者側に要求してくることである。つまり、ここで批判されるのは結局、倫理的な態度そのものではなく、あくまで倫理的要素と結びついた芸術的手法である。その意味で、やはりこれは善なる態度そのものが芸術的価値を下げるケースではないと。

私はこの再反論を部分的に受け入れる。たしかに、このケースで批判されているのは、実際には、倫理的な善をそのまま芸術的に素晴らしいものとして描こうとした、そのセンスの無さである。その意味でこれは、やはり一面としては美的な失敗なのだ。だが、このセンスの無さに対する批判は、先のケースと異

なり、倫理的な善さと完全に切り離せるものではない。それはこの陳腐さが、CGや映像技法の陳腐さと違って、作品の倫理的態度と連動してもたらされる陳腐さだからである。このケースにおいては、倫理的価値を高める要素（倫理的に善い態度をとっていること）が、芸術的価値を下げる要素（その倫理的態度を、芸術的手法を通じて提示すること）へと結びついている。倫理的態度が芸術的手法を通じて打ち出されることまさにそのことによって、われわれは陳腐さを感じとり、それによって作品への没頭が途切れるのである。このケースでは、倫理的な要素と芸術的価値との間に切り離せない関連性^{（レバンス）}が存在しており、さらに、その影響は芸術的価値を下げる側に働いている。

以上により、私は倫理的に善い方向においては、たとえまさに倫理的に善い態度そのものが作品の価値を下げるのではないとしても、少なくとも倫理的に善い態度を示すことが芸術的価値の低下につながりうる、と考える。最後に、より一般的な観点からもう少しこの議論を敷衍しつつ、本論の結論としよう。

結…正の方向における、美と倫理との乖離

本論の議論が不十分であるのは承知の上で、最後に私は見通しとして、次のような考えを提示しておきたい。正の方向においては、没頭を妨げるかどうかや、ふさわしい反応に対して反発するかどうかは、倫理性の有無とは一致しないことがある、と。

私の見るところ、倫理的長所と倫理的欠陥が美的経験に与える影響は非対称的である。先に見たように、負の方向においては、倫理的欠陥がさまざまな仕方であれわれの観賞を妨げる。悪しき態度の是認を要求

されることから想像的抵抗が引き起こされることは現にあるし、また、倫理的反省によって、当該作品を芸術作品として認めるべきではないと判断することもある。要するに、負の側においては、嫌悪や反発から、また義務や規範についての反省的考察から、芸術的価値は低められうるのである（さらには芸術としての地位を剥奪されることすらある）。

だが、それと対称的なことがすべて正の側でも起こるかというところではない。倫理的に正しいことが、われわれの想像的没頭を促進させるわけではない（それはせいぜい、われわれの想像を妨げない、という程度である）。また、ある作品に芸術としての地位を与えようとするときに、倫理的に善いことが理由として用いられることもないだろう。作品の価値の大小には倫理的な善さは寄与するけれど、作品が芸術かどうかについては倫理的な善さは寄与しないのである（一方、先に述べたように、倫理的な悪さは、作品が芸術かどうかを左右するかもしれない）。結局、倫理的に善いことは、必ずしも芸術的価値を促進するわけではないのである。

われわれはここで、倫理的価値と芸術的価値が、アナロジカルな関係にはない、という考え方に、あらためて着目すべきだろう。⁽²⁸⁾たとえば、倫理的価値は（とりわけ徳倫理の立場に立つならば）時代を通じてある程度不変的なものであるが、芸術的価値は、他の作品や文化慣習との関連で価値が大幅に左右される（この理由のひとつとしては、倫理的価値を評価する際には、独自性や創意性といった基準が採用されない、という点が挙げられよう）。また、倫理的価値判断がなされるのは状況に対してであるが、芸術的価値判断がなされるのは対象に対してである、という意見もある。⁽²⁹⁾さらに、善や悪とはそもそも、好みや飽きの対象、つまり趣味の対象となるようなものではない。われわれは当該の事柄が善であることそれ自体を趣

味の観点から否定することはないし、ある善なる態度を好みに合わないからといって悪とみなすこともできない。一方、善を描くある手法が芸術的価値をもつかどうかは、つねに美的観点から議論される。善を描く手法や、そこで善を美的に見る態度の芸術性は、時代状況や他の作品との関連において査定されるものであるし、また、飽きの対象となりうるのである。

これらの点に鑑みれば、徳をつねに美とみなすべきだというゴートの主張には、私としてはやはり賛同しかねる。徳の美という考え方それ自体まだ正当化は不十分であるし、たとえ徳の美しさのようなものがありうるとしても、それが時代不変的な美であるのかどうか、また、文化から独立的なものなのかなどについても、検討の余地があるだろう。ゴートは「徳の美」という考えは古来からの伝統的な考えであったと述べているが、単に歴史性を主張するだけでは、その考え方の正当化には不十分である。⁽³⁰⁾この点について検討することは、本論の範囲を超えているし、より膨大な紙幅を必要とするだろう。ここでは、これらの事項を検討課題として挙げるにとどめておく。

とはいえ本論の議論により、ゴートの倫理主義が負の方向の説明に関してはかなりの妥当性を保持していること、また正の方向の説明に関してはいまだ検討の余地があること、などは明示されたのではないかと思う。本論が最終的な見通しとして提示したのは、ゴートのいう完全な倫理主義（full-blooded ethicist）ではなく、不完全な倫理主義（half-way ethicist）である。私としても、本論の議論でこの立場が十分に確立できたとは考えていない。おそらくこの立場を擁護するためには、飽きや情動、想像的抵抗や、規範的判断など、本論で扱えなかった様々なトピックに関してさらなる議論が必要となるだろう。本論は、その長く複雑な議論へ取り組むための、あくまでひとつの足がかりを示したに過ぎない。本論が示したのは、芸術

と倫理性との間にある、複雑かつ興味深い関係のほんの一端でしかないのである。

References

- Anderson, James, and Jeffrey Dean. 1998. "Moderate Autonomism." *British Journal of Aesthetics* 38: 150-66.
- Carroll, Noël. 1996. "Moderate Moralism." *British Journal of Aesthetics* 36: 223-38.
- . 1998. "Moderate Moralism versus Moderate Autonomism." *British Journal of Aesthetics* 38: 419-24.
- . 2000. "Art and Ethical Criticism: An Overview of Recent Research." *Ethics* 110: 350-87.
- . 2002. "The Wheel of Virtue: Art, Literature, and Moral Knowledge." *Journal of Aesthetics and Art Criticism* 60: 3-26.
- Dickie, George. 2005. "The Triumph in Triumph of the Will." *British Journal of Aesthetics* 45: 151-6.
- Eaton, Marcia. 2008. "Aesthetic Obligations." *Journal of Aesthetics and Art Criticism* 66: 1-9.
- Gaut, Berys. 1998. "The Ethical Criticism of Art." In *Aesthetic and Ethics*, ed. Jerrold Levinson. Cambridge: Cambridge University Press, 182-203.
- . 2007. *Art, Emotion, and Ethics*. Oxford: Oxford University Press.
- Giovannelli, Alessandro. 2010. "Art, Emotion and Ethics by Gaut, Berys (Book review)." *Mind* 119 (474): 481-7.
- Hampshire, Stuart. 1954. "Logic and Appreciation." in *Aesthetics and Language*, ed. William Elton. Oxford: Basil Blackwell: 161-9.
- Jacobson, Daniel. 1997. "In Praise of Immoral Art." *Philosophical Topics* 25: 155-99.
- . 2006. "Ethical Criticism and the Vice of Moderation." In *Contemporary Debates in Aesthetics and the Philosophy of Art*, ed. Matthew Kieran. Oxford: Blackwell, 342-56.
- Jacobson, Daniel and Justin D'Arms. 2000. "The Moralistic Fallacy: On the 'Appropriateness' of Emotions." *Philosophy and Art*, ed. Matthew Kieran. Oxford: Blackwell, 332-41.
- John, Eileen. 2006. "Artistic Value and Opportunistic Moralism." In *Contemporary Debates in Aesthetics and the Philosophy of Art*, ed. Matthew Kieran. Oxford: Blackwell, 332-41.
- Kieran, Matthew. "Art, Imagination and the Cultivation of Morals." *Journal of Aesthetics and Art Criticism* 54: 337-51.
- . 2001. "In Defense of the Ethical Evaluation of Narrative Art." *British Journal of Aesthetics* 41: 26-38.
- . 2003. "Forbidden Knowledge: The Challenge of Immoralism." In *Art and Morality*, eds. José Luis Bermúdez and Sebastian Gardner. Routledge.
- Levinson, Jerrold, ed. 1998. *Aesthetics and Ethics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Moran, Richard. 1994. "The Expression of Feeling in Imagination." *Philosophical Review* 103: 75-106.
- 西村清和. 2010. 「ヘラスチックの木ぞなにが悪いのか。——〈美道〉と〈倫理道〉をめぐって」『美学芸術研究』第二八号。東京大学美学芸術学研究室。一四一—一七七頁。
- Peck, Ella. 2005. "Ethical Criticism of Art" *Internet Encyclopedia of Philosophy* (<http://www.iep.utm.edu/art-eth/>).
- Stecker, Robert. 2008. "Art, Emotion and Ethics by Gaut, Berys (Book review)." *Journal of Aesthetics and Art Criticism* 66: 199-201.
- . 2010. *Aesthetics and Philosophy of Art: 2nd edition*. Rowman & Littlefield.
- Stokes, Dustin. 2006. "The Evaluative Character of Imaginative Resistance." *British Journal of Aesthetics* 46: 387-405.
- Strandberg, Caj. 2011. "A Structural Disanalogy between Aesthetic and Ethical Value Judgement." *British Journal of Aesthetics* 51: 51-67.
- Walton, Kendall. 1990. *Mimesis as Make-Believe*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- . 1994. "Morals in Fiction and Fictional Morality." *Proceedings of the Aristotelian Society*, Suppl. 68: 27-50.

●注

(1) 本論では以下のような略語を用いる。芸術的価値に影響する倫理的長所: RE+ (Relevant Ethical Merit) 、芸術的価値に影響する倫理的欠陥: RE- (Relevant Ethical Flaw) 、芸術的価値の向上: Ar+ (Artistic value) 、芸術的価値の低下: Ar-。

(2) ゴート自身はこの立場を説明するとき、反理論主義ではなく「文脈主義 (contextualism)」という名称を用いている。とはいえ、この論争においては作品が観賞される文脈が問題になっているわけではないので、本論では、より内実に即しかつ誤解を招かない名称として、Stecker [2010] にならい、反理論主義という語を採用した。とはいえ、この立場の主張は「倫理的な善し悪しと芸術的価値の上下に、一定の方向性は存在せず、価値が上がるか下がるかは各作品を見るしかない」という主張であって、「倫理的特徴から芸術的価値への影響関係について、そもそも理論的考察が不可能だ」という主張ではない。つまり、この反理論主義は、しかじかの倫理的特徴が出揃えば芸術的価値は必ず下がる (もしくは上がる)、といった理論の構築可能性を否定するものではない。

(3) 本論が考察するのは、作品の倫理性が芸術的価値に与える影響である。本論はその逆、すなわち美的な要素が倫理的帰結に与える影響については考察しないし、また、いかなる作品を規制すべきかという公共政策的な問題についても考察しない。というのも、この問題にとりくむには、「美的なレベルでの心の動き (たとえば感動やエキサイトメント)」が、倫理的教化・墮落にどのように関わるか」といった認知社会学的、教育学的、ひいては政治的な考察が必要となり、それは私の能力の範囲を大きく超えるからである。

(4) とはいえ、ワグナー自身が「音楽におけるユダヤ性」(1885) において反ユダヤ主義を打ち出している以上、彼の作品には幾許かの非倫理性が備わっているといえるかもしれない。

(5) とはいえゴートは、作者の意図がまさに作品の意味となるという、「意図と意味の同一説」を採っている

わけではない。作者の意図に関するゴートの見解はAE72-76を参照。ちなみにStecker [2010] は「作品の意味は基本的には作家の意図に従うが、慣習的解釈を大幅に逸脱するような読解が要求される場合には、意味は慣習に支配される」という実際の意図主義の穏健なヴァージョンを擁護している (Stecker [2010] の第七章を見よ)。私としても、本問題を考察するに当たっては、この立場を採るのがよいと考えている。

(6) ゴートの理論を検討する際に注意すべきは、ゴートは「美的価値」という語に、一般に言われる「芸術的価値」という意味を含めている、という点である (AE34-41)。この用語法については、Stecker [2008] が述べるように、コンセプチュアル・アートについての言明——たとえば「美的価値を排除しつくした傑作」などの言明——が理解しづらくなるなど、幾多の問題を含むため、本論ではここで行われている論争を、作品の倫理性と「芸術的価値」との関係についての論争として、議論を進める (私としても、この美的価値と芸術的価値の概念は最終的には区別されるべきだと考えている)。とはいえ注意が必要なのは、ゴートは芸術的価値に関して、いわゆる「美的なもの」一元論のような狭い見解を採っているわけではない、という点である。ゴートが採っているのは、芸術的・美的価値に関して、倫理的価値・認識的価値を含み入れる多元主義である。

(7) 芸術的価値に関しては、ここでは個別観賞者の好みを問題にしているのではない、という点も押さえておくべきだろう。たしかにある変質者は幼児殺人を賛美する作品こそが良い作品だと考えるかもしれないが、本論争はそのような個人的嗜好を問題にしているわけではない。ここで問題としているのは、より一般的、芸術史的な観点から作品に与えられる芸術的価値であり、また、その価値の高低を説明する理由として、倫理的要素がどう用いられるべきか、である。

(8) とはいえ、キャロル自身は結局、作品の不道德性が作品の価値を高めている具体的事例を提示していない。よって、この「ときに」の解釈次第では (つまりこの「ときに」を「影響関係があるときには」に正比例関係であるが、ときに影響関係がないことがある) という意味で解釈するならば)、キャロルは倫理主義に

組み入れられる。

- (9) キーランは Kieran [1996] においては倫理主義に近い立場をとっているが、のちに Kieran [2003] において、反理論主義の側に立場を変えている。

- (10) アンダーソンとディーンは穏健な自律主義という立場を打ち出し、〈芸術に対する倫理的批評は妥当であるが、その倫理的批評が作品がもつ芸術そのものとしての価値 (value of an artwork qua artwork) に影響することはない〉と主張している (Anderson and Deam [1998])。この芸術そのものとしての価値に関する彼らの見解は、美的価値と芸術的価値を同一視するゴートの見解と異なるため、注意が必要である。アンダーソンとディーンという芸術的価値は、認識的価値などを含み入れないという点で、ゴートの美的・芸術的価値よりも狭い。そして、ゴートの区分によれば、最終的に彼らの位置は自律主義に位置すると思われる。アンダーソンとディーンに対する批判としては、Peck [2005] を見よ。一方、Dicke [2005] は、アンダーソンとディーンの主張を、キャロルの穏健な道徳主義と比較しつつ、擁護している。

- (11) 「想像的抵抗」という現象については、その原因や特徴づけに関して、近年盛んに議論が行われている。この問題を近年取り上げたのはリチャード・モランやケンダル・ウォルトンであるが、その後タマー・ゲンドラー、ダスティン・ストークスらによって考察が進められ、心の哲学や心理学の領域と結びつきつつ、今もさらなる解明が進められている (Moran [1994], Walton [1990] [1994], Gendler [2000], Stokes [2006])。この抵抗により想像的没頭が妨げられることが即、芸術的価値の低下となるわけではないが、とはいえ両者の間に関係がまったくないとも言いがたい。

- (12) 西村清和は近年、「美的フレイミング」という概念を提出し、こうした判断について論じている (西村 [2010])。先の「想像的抵抗」が〈倫理的な反感から、観賞者が作品内容を想像することに無意識に抵抗してしまう〉という事態であるのに対し、西村が問題にしているのは、〈作品の不道徳性をつよく認識することで、観賞者が観賞態度それ自体を意志的に慎む〉という事態である。

- (13) ゴート自身はこのようなパターン区分を行っているわけではない。以下のまとめは、私によるものである。
- (14) ただしこうした主張は恣意的なものであつてはならない。ここでは、解釈を正当化させるための明確な材料が必要となる。われわれはふつう、自分の解釈を正当化するために、文学史的事実や作品内の記述など、客観的な材料を用いている。

- (15) ゴートはわれわれがいかにして不道徳な態度に陥つてしまふかを描くような表現手法を「誘惑戦略 (seduction strategy)」と名づけている (AE191-2)。一方、倫理的葛藤をつうじてキャラクターが倫理的に重要な本質を認識するさまを描く、という手法を「倫理探究戦略 (ethical journey strategy)」と呼ばれる。これらは共に、作品の倫理的価値を高める戦略である。

- (16) 作品の価値を高めているのが、キャラクターの意志の強さや勇敢さに対する賞賛である場合もありうるが、その場合には (a) の応答がなされる。

- (17) Stecker [2010] p.268 も同様の指摘を行っている。

- (18) ゴートは、〈人種差別ジョークにおいては、まさに倫理的に悪しき態度をとることが作品の価値を構成している〉という Jacobson [1997] の主張に対しても、この (c) のパターンの論駁を加えている。差別的ジョークについては、ユーモアに関する複雑な議論に踏み込むことになるので、本論では扱わない。ただし、有色人種の者がそのようなジョークを聞くと、実際にジョークの対象となる有色人種の者にとってはこうした結論が受け入れがたいものとなることもありうる、とゴートは認めている点は重要であろう。この場合、その差別的ジョークには、次の (e) のような評価が与えられる。同様に、暴力作品のうちに無視できない仕方である倫理的悪が現れている場合についても、次の (e) のような対応がなされるだろう。

- (19) ゴートが最初に倫理主義を提出した際 (Gaut [1998]) に述べていた「ふさわしい反応 (merited response)」という考え方については、その「ふさわしさ」が何に基づいて決定されるのかがやや曖昧であったため解釈に混乱が見られた (ジェイコブソンやハロルドが、この概念の曖昧さについて論じている (Jacobson [2006],

Harold [2006])。Gaut [2007] ではこうした批判をうけて「非倫理的な反応は、ふさわしくない反応である」などと補足的応答がなされている。ゴートの説明によれば、反応のふさわしさは、単に功利的な帰結をもたらすとか、場の空気に従うという点から決まるのではなく、倫理的な（おそらく徳倫理的な）考察に従う。ゴートが、フランス革命期のギロチン公開処刑の例を挙げているのは示唆的である。フランス革命期に観衆たちが斬首を見て楽しんでいたらと云うと、斬首が楽しむべきものだということにはならない。つまり、ある反応が慣習によって容認されているからといって、その反応が倫理的に責められないものとなるわけではない、したがって、その反応がふさわしい反応になることも限らないのである (AE29)。

そしてここが、ゴートとジェイコブソンの立場が分かれる地点となる。ジェイコブソンによれば、可笑しいけど状況に鑑みると笑うべきではないような差別的・皮肉的ジョークは、結局のところ、笑うべきではないといえやはり可笑しいジョークである。そうしたジョークの面白さは、道徳的にみてアクセシにくいもの (morally inaccessible) であるが、だからといってそのジョークが面白くないということにはならない、というわけだ。一方、ゴートによれば、反応のふさわしさは倫理的考察にもとづいて決定されるのであり、倫理的考察を踏まえれば、やはり差別的ジョークは可笑しくないとされる。

(20) といえ、ステッカーは反理論主義を支持する作品が絶対に存在し得ないと主張することはせず、今後そのような作品が現れる可能性は否定できないと述べ、反理論主義に一定の可能性を認めている。

(21) といえ、ゴート自身が倫理主義を擁護するためのア・プリオリな論証として提示している (1) 道徳美論法 (moral beauty argument)、(2) 認識主義的論法 (cognitivist argument)、(3) ふさわしい反応からの論法 (merited response argument) の三つの論法がそれぞれ上手くいつているかどうかは、さらなる検証の余地があるだろう。残念ながら本論にはその検討を詳細に行う余裕はない。ここでは、Gaut [2007] に対する書評のなかで、ステッカーが (1) に対して、またジョヴァンネリは (3) に対して、疑念を提示していることだけ指摘しておく (Stecker [2008], Giovannelli [2010])。

(22) 「もしある性質が道徳的徳 (moral virtue) であるならば、それは美しい特性 (character trait) である。また逆に、もしある性質が悪徳 (moral vice) であるならば、それは醜い特性である」 (AE120)。

(23) といえ、その説教臭い人は、決して悪しき態度を是認させようとしているわけではない。「説教臭い」という批判は、暴力や嘘つきを悪だと責めるような積極的批判ではなく、視野が狭い、相手の立場についての認識が欠けているなどの消極的批判である。

(24) 「陳腐」という性質の構成には、各個人が当該性質に対して飽きることが密接に関わっている。とはいえ、「陳腐」概念は単に個人的な飽きの問題には回収されない。というのも、「陳腐」とは、他の作品や社会的価値観などの、当の作品をとりまく関係性のうちに現れるものであり、また、そうした背景のもとで語られるものだからである。

(25) といえ、この飽きは倫理的な嫌悪・反発とは異なる反応である。飽きは、必ずしもポジティブな嫌悪・反発に結びつくとは限らない。飽きるといふ反応の複雑な構造については、また稿を改めて論じることしたい。

(26) これは、視野の狭い倫理観を打ち出したがために作品の質が下がるのとは、また別のケースである。ゴートが否定する説教臭い作品は、打ち出した倫理的態度が倫理的欠陥を抱えていたために、倫理的に悪い作品とされたのであった。いま問題にしているのは、倫理的な態度を打ち出すよりも、倫理的な態度を打ち出さなかったほうが良かったのに……、というケースである。

(27) 芸術としての地位と、作品の芸術的価値を独立のものとして考える立場に立つならば、いかに作品の芸術的価値が下がるうともそれが芸術でなくなることはない、という主張は可能である。ただし、倫理的価値があまりに低い作品を、芸術制度、慣習が芸術作品としてつねに受け入れるかどうかは、明らかではない。

(28) Hampshire [1954] はこのような考えを提出した古典的論考である。一方、近年 Eaton [2008] は、同様の考えを提出しつつも、両価値の間に深い関連性があることを主張している。

(29) Strandberg [2011]. この論文で、ストランドバーグは美的価値判断と倫理的価値判断とのアナロジーが成り立たないと主張している。彼の以下の箴言は、頭の隅に留めておいてもよいだろう。「美学者たちは、同僚の倫理学者の研究結果にもとづいて自身の見解を構築しないよう、注意すべきだと思われる」(Strandberg [2011] p.67)。

(30) Stecker [2008] も同様の指摘を行っている。

第六章 自己表現と〈癒し〉

——〈臨生〉芸術への試論

荒井裕樹

一 はじめに……〈臨生〉の試み

言語表現にせよ、非言語表現にせよ、自己の内側に鬱屈した感情を表現することは、果たして人間を〈癒し〉得るのか。そもそも、そのような自己表現が人間を〈癒す〉とは、具体的にいかなる事態のことを意味しているのか。手垢にまみれ、ひどく擦り切れてしまった感のあるこの言葉について（しかしながら、その可能性を諦めきれないこの言葉について）、今更ながら考えてみることも無意味なことではないだろう。

表現という行為が持つ可能性については、例えば「芸術療法」や「アート・セラピー」といった形で、主に「精神病者」の描画表現を中心に貴重な研究・実践が積み重ねられてきた。¹⁾かつては「患者」の特異な表現が病理学的なサンプルとして捉えられ、「医療者」が構築した理論によって（あるいは「医療者」が理論を構築するために）一方的に解釈・意味付けされてきたことも少なくなかったが、近年では、むしろ表現と